



2020年4月11日(土) 15:00 開演 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

世界をリードする弦楽四重奏の響宴 Vol.5 アタッカ・クアルテット

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団／あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

※公演中止のため、各執筆者の協力により公開いたします

Program Notes

小味渕彦之（音楽学、音楽評論）

アタッカ・クアルテットが大阪国際室内楽コンクールで第1位に輝いたのは、2011年に開かれた第7回大会でのこと。ニューヨークを本拠とする彼らは、その後も精力的に活動を続けてきました。幅広いレパートリーを手がける中で、ハイドンや同時代のジョン・アダムスの作品に集中して取り組むなど、独自の方向性を見出しています。

ハイドン / 弦楽四重奏曲 ハ長調 op. 20-2

ヨーゼフ・ハイドン (1732-1809) は「パパ・ハイドン」と呼ばれ、モーツァルトやベートーヴェンと共に、音楽史に一時代を築き上げた「ウィーン古典派」の一翼を担いました。ハイドンは交響曲を書き始める以前から弦楽四重奏曲を手がけていて、最後に取り組んだのは1803年ですから、中断した時期はあっても、室内楽創作の中心ジャンルであることに間違いありません。60曲を超える作品が残されました。

「作品20」の弦楽四重奏曲集は、1772年に作曲されました。当時の慣習通りに6曲のセットになっていて、これまでのハイドンの弦楽四重奏曲と同様に「4声のディヴェルティメント」と記されていました。入念なスケッチをもとに試行錯誤を重ね、ハイドンはこれらの作品を仕上げた様子がかがえます。この時代のハイドンの作品を、シュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）時代としてきました。これは、ゲーテなどの文学の潮流から転用された言葉で、音楽に書かれた強い感情の表出をあらわしています。

《ハ長調 op. 20-2》は4つの楽章で構成されます。メヌエットがこれまでの定石である第2楽章ではなく第3楽章に置かれ、第4楽章にフーガが用いられるという、この曲集の特徴があらわれた作品になっています。〈第1楽章〉はなんともさり気なくチェロが奏でる主題で始まるのですが、入念な展開は堂に入ったもの。〈第2楽章〉は荘厳な雰囲気が始まり、後半は幽玄なアダージョになっています。切れ目なく続けられる〈第3楽章〉は快活なメヌエットになりました。〈第4楽章〉ではフーガの各声部が職人技のように組み合わせられます。その一方で歌謡性も浮かび上がるという古典派ならではの音楽が構築されました。

キャロライン・ショウ / Entr'Acte / Valencia ※2020年グラミー賞受賞CD「Orange」より

キャロライン・ショウ (1982-) はニューヨークを拠点として活躍する作曲家で、ヴォーカリスト、ヴァイオリニスト、プロデューサーとしての顔も持つマルチ・アーティストです。このプログラムに並んだ2曲を含む、アタッカ・クアルテットの演奏による作品集のCD「Orange」が、2020年のグラミー賞で、最優秀室内楽・小編成アンサンブル・パフォーマンス賞を受賞しました。

どちらの作品にもキャロライン・ショウの個性がはっきりとあらわれています。屈託のない自由な作風は、必ずや新時代の弦楽四重奏の歴史を切り開くもの。ショウ氏自身の文章も併せてお読みください。



2020年4月11日(土) 15:00開演 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

世界をリードする弦楽四重奏の響宴 Vol.5 アタッカ・クアルテット

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団／あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

※公演中止のため、各執筆者の協力により公開いたします

ベートーヴェン / 弦楽四重奏曲第14番 嬰ハ短調 op. 131

今年は生誕250年の記念年を迎えたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が残した16曲の弦楽四重奏曲は、このジャンルで避けては通ることの出来ない重要な作品群です。しばしば、ベートーヴェンの「後期四重奏曲」という言い方をしますが、《第12番 変ホ短調 作品127》以降に書かれた5曲の弦楽四重奏曲を指しています。ベートーヴェンの作品の中でも独自の作風を持っていて、孤高の存在とも言われてきました。

これら5曲の弦楽四重奏曲の成立は番号順、作品番号順ではありません。完成した順番に並べると「第12番」「第15番」「第13番」「第14番」「第16番」となります。つまりこの1825年(55歳)12月から1826年8月にかけて書き上げられた《第14番 嬰ハ短調 作品131》は、最後から2つめの弦楽四重奏曲ということになるのです。

全体は7つの部分から構成されるのですが、途切れず一連なりに演奏されます。〈第1部〉は不思議な単旋律のテーマで始まり、これがフーガとなって、悠々たる流れの中で音楽が生まれます。展開と再現が巧妙に行われ、静かな苦悩は最後に薄い響きの中で消え入るように昇華されます。

〈第2部〉は軽やかな歩みの中で、奥行きのある弾力をたたえて進みます。諧謔的なおどけた要素もあって、従来のスケルツォに相当するかと思いきや、本来のスケルツォ楽章に当たる部分は後で別に用意されています。鋭い切り込みが聴こえると〈第3部〉となりますが、ここはあたかもレチタティーヴォのように、短い経過部として書かれていて、メロディが奏でられたところからが〈第4部〉です。変奏曲形式を用いたこの部分が7部分で最も長く、作品の中核となりました。主題が6つの変奏に発展して、入念に主題が姿を変えて行きます。それぞれの楽器がカデンツァのように奏で連ねるところでコーダ(終結部)に突入。このコーダの終わりの部分をベートーヴェンは何度も書き直した末に確定したとされています。突如としてチェロが4つの音を強く連ねると〈第5部〉。息急き切ったように音楽が転がり始めます。これがスケルツォ楽章に相当するもの。パズルのピースを当てはめるように組み合わせられて進みます。一旦、音楽が終わると、ソ#(gis)の音が高さを変えて3つ連ねて、その後がフィナーレへの導入としての〈第6部〉。4小節単位の短い2種のメロディを組み合わせ、その前後に序奏とコーダが簡潔に付きました。〈第7部〉は怒涛の前進に、うねる響きが絡み合います。ソナタ形式として理解できるのですが、かなり自由な構成を持っています。コーダも突き進むだけのものではなく、逡巡し、迷った末、「ああ終わらなければいけない！」と言っているかのように、藪から棒に曲は幕切れを迎えます。ベートーヴェンはこの作品の出来栄に大層満足していた様子で、「最高の作品」と語ったと伝えられています。



2020年4月11日(土) 15:00 開演 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

世界をリードする弦楽四重奏の響宴 Vol.5 アタッカ・クアルテット

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団／あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

※公演中止のため、各執筆者の協力により公開いたします

CD『Orange』 Booklet Notes

キャロライン・ショウ (作曲家)

Valencia

ごく普通のオレンジ。そこにはどこか、たまらない魅力があるように思う。（「ヴァレンシア」は全国のスーパーで置かれている、一般的なオレンジの一つだ。）何百と連なる色とりどりのつぶつぶからは、今にも果汁が弾け出てきそう…シンプルなのに入り組んでいて、何だか特別な自然の恵み。この作品は、ある夏に共演したパフォーマンス・アーティスト、グラッサーの、彼女自身が書いた歌についての説明にインスピレーションを受けたもの。彼女の歌は、果物という存在のシンプルな美について書かれたものだった。その歌を演奏して少し後に親しい友人たちと演奏するために「ヴァレンシア」を作曲することになった時、グラッサーのメロディと音の質感に対する勇敢かつ直感的なアプローチを自分でも取り入れることにした。そうして「ヴァレンシア」は、たなびくフラジオレットの彩と、凝縮された果汁のようなハーモニーや旋律をとおして、ごく普通のオレンジの構造を存分に愛し、受け入れる作品となった。そしてこれは、いまだ私たちの手の届くところにある、ありのままで飾らない、美しい食べ物たちへの感謝でもある。

Entr'Acte

コンサートに行って、自分が思い描いていたのと全く違う経験をして帰って来たことは誰にでもあると思う。ほんの一瞬の出来事だったのだけれど、それが自分にとってその経験に対する印象をガラリと変えてしまうものだった…みたい。私にとって「それ」は、ブレンターノ弦楽四重奏団がハイドンの弦楽四重奏作品 77 第 2 番の第二楽章を演奏した時、唐突に起きた。彼らは冒頭部のへ長調のメニューエットから突然角を曲がって、想像もしていなかったような変口長調のトリオという美しい世界に私たちをいざなったのだ。その変化に感動した私は、自分でもそんな風に様々な世界観を旅する作品を作りたいと想像力を張り巡らしたのだった。

Entr'Acte は伝統的なメニューエットとトリオの構造を礎にしつつ、古典派の作品の常識よりは少し外れたアプローチをとっている。私は個人的にこのハイドンのメニューエットのような、突然鏡の国のアリスの世界に連れ去られてしまうような音楽が大好きだ。何だか妙で、繊細で、フィルターがかかったような世界。溶けてしまったような比喻と下手くそな頭韻に溢れる世界。何となくごまかされているような、それでいて妙に懐かしい世界。

